の論文内でいわば無条件で並列し比較することを可能にしたのであるが、結果的に個々の事例の特殊性を検討することが放棄されてしまっている。また、多くの知識人たちが証人として登場しているかに見えて、実際には引用が数人のドイツ語圏とフランスの作家、批評家に偏っていて、ディレッタンティズムをヨーロッパ全体の現象として考察するには少し不十分なように思われる。さらに、シラーから出発し、絶えず彼の問題の枠内に止まることで、著者は自分のテーゼを様々な文献を通して繰り返し裏付けることに熱心になり過ぎて、結果として全体的に論文が単調平板なものになってしまったように思われる。ディレッタントが生まれる背景に啓蒙を見ることに全く異論はないが、精神史的な側面は啓蒙のプロセスの一部分に過ぎないのであって、政治的、経済的な社会構造の変化、さらには科学的な発明が人間に与える影響も看過できないのではないだろうか。ピーター・ゲイの『快楽戦争』(1998) や『シュニッツラーの世紀』(2001)のように、文学的表象を分類するにとどまらず経済学的データまで幅広い情報を駆使して時代の傾向を精緻に描く方向性がこの論文に備わっていれば、ディレッタンティズムの文化史的な奥行きの広さを実感させるようなものになっていたのではないか。

(Würzburg: Königshausen & Neumann 1996)

Ekkehard W. Haring: Auf dieses Messers Schneide leben wir...
— Das Spätwerk Franz Kafkas im Kontext jüdischen Schreibens

佐々木 茂 人

改めて言う必要はないだろうが、いまやカフカ研究は見通しがつかないほど多様化し、またそれぞれの研究領域は独立した流れを形成するほど深化している。カフカ・ユダヤ研究も例にもれず、初期の神学的解釈から、伝記的解釈、受容研究、文化史的アプローチを経て、現在ではジェンダー研究などが応用されるに至っている。これらの研究が残してきた膨大な解釈の蓄積は、さながら旧約聖書 (モーゼ五書) に加えられたおびただしい解釈および注釈の総体としてのタルムードを想起させる。従来の研究に新たな解釈を付け加えようとする者は、タルムード学者よろしく、それまでの議論を参考にしつつ、また、相対立している見解と奮闘しながら、自らの解釈を捻り出さなければならない。著者ハーリングも、そうした意味ではカフカ研究史の批判的継承を目ざすタルムード学者の一人であるといえよう。

ハーリングは一貫してカフカを論じてきた。修士論文はカフカ後期の短編『ある犬の研究』を扱い (1995 年刊)、その後は『ユダヤのこだま』誌〔*Das Jüdische Echo*〕を発表媒体にして日

記に関する論文などを寄稿している。2000年に本書の原型となる博士論文を提出、翌2001年には、やはり『ユダヤのこだま』誌上で『カフカ・ユダヤ研究の道程』を発表（オンラインで公開、www.kafka.org/essays/haring.htm）、従来のカフカ・ユダヤ研究の「批判的概観」を行っている。時期からすれば本書との関連が想定される論文であるが、じじつ概観を終えるにあたって、本書のテーマ「カフカのユダヤ性と書くことの関連」が今後は「より徹底した読み」を通して探られなければならないと述べられている。その課題への一つの解答、すなわち研究史の批判的継承の実践が本書ということになろう。

本書は三章立ての構成を取り、第1章が全体のテーマの俯瞰、第2章が日記、手紙、断片を中心にしたテクスト分析、第3章が後期の短編を論じるテクスト解釈に充てられている。それぞれ総括しておきたい。

第1章では、オーストリア＝ハンガリー二重帝国からチェコスロバキア（第一共和制）への政体の移行とユダヤ人をめぐるさまざまな言説が、時間軸に沿ってモザイク状にまとめられている。同化問題、シオニズム、言語、病などの議論は、従来の研究をなぞるものであるが、叙述はチューラウ（1917年）以降に絞られている。それは、ハーリングがこの時期を境にカフカにおける「書くこと」の位相が変わったと推定するからである。カフカにとって「書くこと」は「アイデンティティの雛形」であると同時にカタルシスでもあったが、チューラウ時代のテクストからは、そうした以前の「書くこと」を相対化する言説が読み取れ、もはや「書くこと」はカフカに希望を与えなくなるとされるのである。また、俯瞰のモザイクには、『セイレーンの沈黙』、『プロメテウス』、ゴーレムの断片などの分析および解釈が組み込まれている。これらのテクストからハーリングが取り出すのは、一元的な神話の起源を複数の「言い伝え」によって相対化する側面である。神話的表象が民族アイデンティティの基盤として読み換えられる当時の言説に照らすと、カフカのテクストはそれらから逸脱していることが分かるという。

第2章は従来の議論を利用したテクスト分析に充てられる。ここでは分析のモデルとして、『父への手紙』、『シナゴーグの獣』、「小国民の文学」ならびにアブラハムに関する手紙などが取り上げられる。『父への手紙』はカフカにおけるユダヤ性の問題にアプローチする手がかりとしてつとに有名であるが、ハーリングはブルームの『影響の不安』――先行テクスト＝父の影響への反抗が文学作品を特徴づける――を比較材料に用い、テクストが父への「不安」と「反抗」にとどまらないことを読み取ろうとする。未完に終わった『シナゴーグの獣』については、シナゴーグの建築構造と慣習（男性と女性を分けて座らせる）および獣と女性との引力関係から、ヴァイニンガーの「女性の存在論的な虚偽性」を、さらに獣がシナゴーグという民族的トポスの空間でアイデンティティを喪失しているのを捉えて、「色あせてゆくユダヤの記憶」を読み解く。「小国民の文学」では、カフカ文学を「マイナー文学」と位置づけたドゥルーズ／ガタリの議論を暗に批

判して、カフカはあくまで「その試みのディレンマ」に囚われていたとしながらも、ドゥルーズらが提唱したカフカの「非領域化」志向を実質的に掬いだしている。また、クロプシュトックとの文通に記された三つのアブラハム解釈では、カフカの描く「父祖」の像が、考察のきっかけとなったキルケゴールの言説はむろん、当時の言説に見られるアブラハム像とも齟齬をきたしていると論じられ、その点にカフカは「自己への皮肉も込めながら、西方ユダヤ人の散文的な現象を描いた」と述べられる。

第３章は、それまでの章で得られた観点を応用した解釈の試みに充てられる。対象となるのは、『断食芸人』、『ある犬の研究』、『歌姫ヨゼフィーネあるいはネズミ一族』といった比較的長いテクストである。『断食芸人』のテーマである「禁欲」は、世紀転換期にベストセラーになったラーベの『飢えたる牧師』（禁欲家のキリスト教徒と強欲なユダヤ教徒の物語）を念頭に据えていたとされ、ユダヤ人の社会的上昇志向、さらには「進歩」との関連において読み換えられる。その上で、第２章で『夜』や『掟の前』から析出された「番人」〔Wächter〕と『芸術の番人』〔*Kunstwart*〕との連関が、断食芸人とその見張り人との描写に探られている。『断食芸人』は同化の矛盾と西方ユダヤにおける芸術のあり方を洞察した物語とされる。『ある犬の研究』では、ベルクマンの『名前の神聖化』〔*Kiddusch haschem*〕と『モーゼの言葉』〔*Worte Mosis*〕とブーバーの議論における、「言葉の発話性」――言葉と音との絶対的結びつきにおける権威――がテクストで犬の語る「真実の言葉」と結びつけられる。ここでも第２章で提出されたアブラハム像分析がモーゼ像に適用され、カフカはベルクマン、ブーバーらの議論から逸脱しているとされる。『ヨゼフィーネ』では、戦後のシオニズムにおける指導者の不在というコンテクスト、「イディッシュ語を話すこと／でたらめ語」〔Mauscheln〕に関する議論を足がかりに、芸術家と民族、また歌と民族の関係が解釈される。テクストにおける「ネズ鳴き」〔piepsen〕の位相は、クラウスとの関連からMauscheln に、またカフカによって西方ユダヤの象徴とされた結核（呼吸時の piepsen）との関連からカフカにつながる。さらには語り手の記述の矛盾とイェルシャルミの議論から、テクストが「非歴史的メシアニズムと歴史的個人記憶」に関わっているとされ、カフカ最後の物語はユダヤ史でもなく個人的記憶でもないユダヤ・アイデンティティを語ると結論づけられる。

本書においてハーリングは原則的に二つの方法に依拠している。いわゆるカフカ詩学の問題群とユダヤ人をめぐる当時の言説とのつながりを浮き彫りにすること、そして、カフカのテクストが当時の言説のイデオロギー機制からいかに免れていたかを明らかにすることである。前者は、主として伝記的研究や文献学的研究が足がかりとしてきた議論と、当時のさまざまな言説の分析を関連づけるものであり、他のカフカ研究の領域と接続を試みていると評価できる。一方、後者の批評のスタイルは、すでにスペクター〔Spector 2000〕が膨大な資料の分析を通じて行っており、ハーリングもそれを踏襲していると考えられる。両者に共通するのはドゥルーズ／ガタリの

「非領域化」を手がかりとした議論である。もっとも、スペクターがジェンダーに関する言説とカフカのテクストの比較分析から「空間」の政治学まで議論を拡大してみせたのと異なり、ハーリングは『父への手紙』をはじめとするさまざまなテクストにエディプス・コンプレックスの破綻を読み込むという手法を採っている。こうした、テクストの比較よりも「読み込み」に重点を置く立場は、ハーリングが思想的研究の系譜を引き継いでいる証左であるが、これによってハーリングは、従来の研究に見られる、ともすればカフカをユダヤ的言説へと還元してしまう危険を回避している。また、アントン・クーやオットー・グロースのテクストとの詳細な比較をはじめとする、随所に散りばめられた数多くの言説分析は、その是非は抜きにしてもきわめて興味深い。これら方法上の特性は研究者によっては評価の割れるところだが、カフカ・ユダヤ研究の一つの帰結であるだろう。

だが一方で、本書には論証の杜撰な点も目につく。従来の研究に目配りが行き届きすぎているせいか、議論の土台となる部分を他の研究に委ねている部分が多々あり、語句の連想を根拠に論述を進めている箇所も相当程度ある。これは何もハーリングに限った話ではないが、たとえば、ここでも挙げたアブラハムやモーゼといった旧約聖書上の人物像は、必ずしもユダヤとの関連でのみ分析されるわけではない。ローデ〔Rohde 2002〕が跡づけたようにカフカのテクストに新約聖書の影響も見られる以上、旧約聖書に表れる人物を即ユダヤ的文脈に結びつける姿勢には問題があろう。また、「読み込み」によってテクストの多層性は明らかにされているが、それぞれの層の関係は説かれず、議論の展開によっては牽強付会に過ぎないかに見える。とりわけ『掟の問題』の一節から採られた本書のタイトルが暗示する「パラドクス」、それはカフカの「書くこと」、「アイデンティティ」などの指標となるキータームであるが、論証もなく西方ユダヤ性と一息に接続され、すべての議論がここへ回帰している印象を受ける。さらには、ユダヤ人に関する言説が完全に西方ユダヤに限定されている点も指摘しておかなければならないだろう。チューラウ時代のテクストでハーリングも解釈の根拠として引き合いに出すアフォリズムには、すでにグレーツィンガー〔Grözinger 2003〕が詳細かつ説得力のある分析を提出している。しかしハーリングはこれにまったく触れない（末尾の参考文献には挙げられているが）。それは、ハーリングが「ユダヤ的伝統」に関する議論を故意に避けているためだと考えられる。有名なアフォリズムを引くまでもなく、カフカ世代は、伝統との隔絶と伝統を体現する東方ユダヤへの憧憬とのはざまに生き、そのはざまにいる意識こそ西方ユダヤ性であった。カフカにおける西方ユダヤ性とユダヤの伝統との関連をめぐる考察が俟たれる。

（Berlin: Braumüller 2004）